

「扇の国、日本」展

サントリー美術館（六本木） 2018. 11. 28～2019. 01. 20



「扇」はかつて、中国から伝わった「うちわ」をもとに日本で発明されたもので、季節や流行に合わせて持ち変えられ、和歌や絵を施すことで人々をつなぐ役割を果たして、日本独自の文化として現代まで息づいてきた。

この携帯できる「扇」は、日常生活用具としてだけでなく、気分や場所、季節に応じて取り換えもでき、何時でも何処でも楽しめる身近な美術品であった。

この「扇」には、「個人的な力を引き寄せるという意味があり、闘いに持参する軍扇も同じで、応援団が扇子をあおいで選手に声援を送るのも名残である。」

また、扇の形自体も末広がり縁起が良く、装飾的で華やかなため、着物や蒔絵などのモチーフとして好まれた。

狩野李之助 《扇画流図》 重要文化財 1633年頃 名古屋城総合事務所蔵



《彩絵（さいえ）檜扇》 重要文化財 12世紀 島根県・佐汰神社蔵



「檜扇」は、ヒノキの薄板で作った扇で、公家の女子が正装の折に彩色したものを手にしたことから、女神の御料として調達された。ヒノキの上に四季折々の草花やチョウなどが彩り豊かに描かれた作品は、社殿の奥に収められ、神体に準ずる扱いを受けてきた。